

編集室

「悼む」ということ

昨年、私は愛する母を亡くした。最期は車椅子での移動しかままならず、母の車椅子を押しながら一緒に平和公園を散歩した。小さいころから私達3人の娘をこよなく愛してくれた母であった。「人からしてもらって嬉しいと思うことを人にしてあげなさい。」と言うのが幼いころからの教えであった。今でも夢の中に出てくるのは緑色の車椅子に乗った小さな母の背中である。母の死を経験して初めて、愛する人を亡くすということが、心にとてつもない圧倒的な悲しみをうむのだと実感した。その悲しみを癒すことができるのは、亡くなった人のことを一緒に語り、悼むことのできる人の存在である。昨年の夏、原爆の日には妹と灯籠流しを行った。母は広島で被爆しており、最期は骨髄でほとんどの細胞が造られなくなっていた。あまり苦しまなかったこと。亡くなるまでずっとそばにすることができ、心の中で多くの思い出を母に語り、話せたことがせめてもの救いである。

私は、30年間の新生児医療の中で多くの赤ちゃんの「死」に接してきた。NICUの中で亡くなっていく小さな赤ちゃんは社会的に認知されにくく、赤ちゃんを亡くした母親は周りの人と悲しみを共有することは難しいことが多い。父親と悲しみのペースが違い、NICUの医療スタッフは看取りのあと、雑多な日常業務の中、記憶

の隅に赤ちゃんの死を追いやってしまう。そして、母親は悲しみから立ち直るのに助けや思いやりが最も必要な時にそれを誰からも受けられない現状がある。母親は赤ちゃんが生きていた思い出が日常の中に何も残っておらず、「記憶」としてそこに戻れるきっかけや場所、手がかりが少なく、「赤ちゃんに十分なことをしてあげることができなかった」「元気に産んであげることができなかった」と赤ちゃんの死が自分の責任のように感じ、挫折感や罪悪感をずっと引きずっていく。Arnoldらは成人が亡くなる場合にはその過去を喪失するが、赤ちゃんが亡くなる場合には、その子と一緒に過ごすはずであった未来を喪失すると述べている。私達NICUスタッフは、母親にとって赤ちゃんが生きた証を話し合えることのできる相手であり、母親が話す「あの子」に会えた数少ない人間である。赤ちゃんとの未来を閉ざされた母親にその赤ちゃんが生きていたことを、そして愛されていたことを、一緒に語り悼むことのできる場が必要であると思う。そして、それは同時に日常的に死と接している医療者にとっても必要なことである。悲しみに終わりがなくとも、思いを語り合えることによって、確かに悲しみは癒えていくのだから。

(林谷 道子)